ＹＭＣＡの会員活動　福祉・交流・教養など多彩

東京ＹＭＣＡの各コミュニティーセンターでは、会員・関係者のアイデアやネットワークを活かし、地域福祉、交流、教養プログラムなど、多岐にわたって活動しています。（▼３面に一覧あり）。今年の会員大会でボランティア・オブ・ザ・イヤーを受賞した「ＹＭＣＡユニークダンス・パーティ」と、名誉会員になった太田太さんが中心となって始めた、音訳ボランティア「シジュウカラ」をご紹介します。

障がいを持つ人と共に楽しむ

東京むかでワイズメンズクラブ協働

ユニークダンス・パーティ

初めての方には踊り方の基本レッスンがあるので、誰でも参加できる。うまく踊れても思ったように踊れなくても、笑顔が耐えない。

東京むかでワイズメンズクラブ
ユニークダンス・パーティ実行委員会　櫻井　浩行

東京むかでワイズメンズクラブはＹＭＣＡの基本理念により、青少年育成のための野外活動（野尻学荘）支援を目的に１９６１年５月10日に設立されました。また地域社会への奉仕活動として１９８３年３月15日に、「共に生きる」をテーマに「第１回ユニークダンス・パーティ」が開催され、毎年、春（４月）と秋（10月）の年２回「ユニークダンス・パーティ」を開催。今年の４月15日に「第57回ユニークダンス・パーティ」を開催して通算29年になります。「ユニークダンス」とは手や足または視力などが不自由な人たち（障がい者）がそれぞれ工夫した踊り方で健常者と共に楽しむソーシャルダンスです。車椅子でも、松葉杖でも簡単に踊れるユニークなダンスです。「ユニークダンス」のコンセプトは（１）障がい者と健常者が共に生きる。（２）障がい者に何かをするのではない。（３）それぞれの障がいは個性である。（４）共にダンスを楽しみながら、交わりを深めよう。以上の概念でパーティのホストを務めています。

←神田美土代町の会館前で

１９８３年春の「第１回むかでユニークダンス・パーティ」より１９９３年秋の「第20回むかでユニークダンス・パーティ」は東京むかでワイズメンズクラブが主催。１９９４年４月17日の第21回より「ＹＭＣＡユニークダンス・パーティ」と改名し東京ＹＭＣＡと東京むかでワイズメンズクラブとの共催となりました。また２００５年10月30日「第44回ＹＭＣＡユニークダンス・パーティ」より江東区社会福祉協議会の後援を受け現在にまで至っています。

会場は、神田美土代町ＹＭＣＡ本館より、ＹＭＣＡ東陽町センター、ティアラこうとう、森下文化センター、ＹＭＣＡ東陽町センターとＹＭＣＡの会場と、ＹＭＣＡのＰＲを兼ねて地域への会場と回りましたが、やはり本拠地へ戻ってきました。

今年、会員大会にて「2011年度Volunteer of the year」に選ばれました。永年の活動が認められ、報われたことに、まさに「継続は宝なり」との思いです。

目の不自由な方の〝目〟になって

音訳ボランティア「シジュウカラ」

音訳の指導者であり名誉会員になった太田太さん（中央）と西東京コミュニティーセンターのみなさん

西東京コミュニティーセンター主任主事　井口　真

音訳ボランティアは、目の不自由な方のために、文字や文章を音声化するボランティアです。２００６年度会員部の新規プログラム開発委員会の答申から誕生しました。会員部運営委員だった田中博之さんが、音訳ボランティアなら、忙しい人たちも家でできると提案されたのです。

西東京コミュニティーセンターは、その提案を受けて、勉強会を始めました。音訳には読み方を教える講師が必要であり、パソコンで録音したものを編集する技術者（構成者）も必要です。その指導を引き受けてくださったのが、今年名誉会員になられた西東京センター会員の太田太さんでした（＝１面参照）。太田さんは、盲人伝道協議会のテープライブラリーを永年指導した経験を活かして、勉強会を立ち上げてくださいました。

他団体の話を聴いたり見学したりと、勉強会を重ね、２０１０年には安定した活動をはじめることができるようになり、八王子盲学校の図書室に最初の作品「読書の時間に読む本１年生」を納品しました。昨年度は「３６５日のベッドタイムストーリー」をはじめとするＣＤ約30枚分（＝写真）を完成したほか、久我山青光学園との繋がりもできました。また、メンバー全員が東京ＹＭＣＡの会員として登録するようになったことも大きなことでした。今年度からは、点字で教科書を読むことが出来ない子どものための音訳を、ネット上のクラウドサービスを使って挑戦しようとしています。

当初は、勉強会だけ体験すると来なくなってしまう人も多く、メンバーが定着し始めたのは２００９年度のことでした。この、試行錯誤の２年間を乗り越えられたのも、太田さんによるところが大きかったと思います。昨年「シジュウカラメンバー名簿」を作成しましたが、そこに太田さんはこう書いておられます。

「常に喜べ、絶えず祈れ、全てのことに感謝せよ。これ、私が与えられたこの世でのモットー。しかし全く難しい。言い訳はたくさんできるけれど、出来ません。一生持参していくつもりです」。そんな太田さんの人柄に、シジュウカラのメンバーはついていったのだと思うし、これからもその思いを受け継いでいくのだと思います。

すべての人を一つにしてください

畏れを知り　謙虚に

彼らはまた言った、「さあ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。そしてわれわれは名を上げて、全地のおもてに散るのを免れよう」。（旧約聖書　創世記11章４節）

日本中が「金環日食」で沸いた日に、東京大学の宇宙研究機構の村山斉（ひとし）さんから宇宙の話を聞きました。なんと宇宙を作っている物質の96％はまだ正体がわからない（暗黒エネルギー・物質）とのことでした。何でも研究して、すべてがわかっているように思う私達人間ですが、実はわからないことのほうが多いのです。謙虚さと「畏れ」を知ることが大事です。思い上がってはいけないと思いました。自然や宇宙には実際のところまだまだ未知の部分が多く、私たち人間は無力な存在なのです。

スカイツリーの完成が世間の注目を集めています。素晴らしい建築物です。高い建築技術の集大成と言えましょう。人々が集まり景気の上昇にも一役買うでしょう。しかし、私には、聖書に出てくるあのバベルの塔を思い起こさせるのです。聖書には、高い塔を作り神に近づこうとして、やがては崩され言葉を乱されて、世界に散っていった愚かで驕れる人間の姿が描かれています。高い塔の建設にあたっては一人ひとりの人間（奴隷）の命より「レンガ」が大切に扱われたのです。先日の埼玉で起こった違法な廃液事件、関越道でのバス事故、原発事故などが象徴している世界です。「人間の命の尊さ」より「高い塔をつくり神様に挑戦する傲慢・限りない欲望」が上位に位置したときに人は散らされて行くのです。

（総主事　廣田光司）

石巻通信 vol.2

女川町で「遊び場」プログラム

「遊び場」に来た子どもたち

↑女川町の中心部の様子

石巻市の東隣に位置する人口約1万人の女川町では、津波の最高到達地点が標高20メートルだったと言われています。町の中心部はリアス式海岸の奥地に位置するため、狭まって高くなった津波が町を飲み込み、建物は一つ残らず流されてしまいました。宮城県発表によれば、震災による死者・行方不明者は827人にのぼり、これは震災前の人口の8.2％にも当たります。

ＹＭＣＡ石巻支援センターでは、4月より継続して女川町での子どもプログラムを行なっています。町内最大の仮設住宅団地がある総合運動公園に遊び道具を用意して伺い、ボランティアと一緒に遊んでもらう「遊び場」を提供しています。これまでに4月29日、4月30日、5月27日、6月24日に行いました。

6月10日のＮＨＫニュースで、この女川町の子どもを取り巻く調査を紹介していました。東北学院大学が町内小学4年生から中学生全員を対象に1週間の学校以外での運動量を調べたところ、１週間で１時間にも満たない子どもが33.8％に上ることが分かりました。全国平均は18.5％であることから、この数字はこの地域の子どもが極端に運動不足に陥っていることを示しています。復旧工事のため、旧市街地は大型車両の交通量が多く危険であり、子ども達の遊び場が無くなってしまったことや、仮設住宅に入ってバス通学になったため、歩いての登下校や放課後の活動が無くなってしまったことが大きいと考えられています。

ＹＭＣＡの遊び場プログラムは、子ども達に失われがちな外遊びを提供し、そして仮設での過酷な暮らしからリフレッシュしてもらうという、地元のニーズに即したものです。女川町は石巻市に比べ人口は7分の1以下という小さい町で、ボランティアの活動も 今はあまり見られない のが現状です。元気な子どもが家庭を明るくし、やがて地域に希望をもたらしていくことを信じて、ＹＭＣＡは今後も継続して地域とともに歩んでいきたいと思います。

（ＹＭＣＡ石巻支援センター　伊藤剛士）